一般財団法人 NHK放送研修センター 日本語センター

平成26年度 長崎県高校文化連盟

顧問研修会

平成27年2月15日(日)

長崎県諫早市

- 発声・発音・韻律など音声表現の指導を知る。
- 分かりやすく的確な表現力とは。
- 放送コメント作成のポイント。
- 作品世界を伝える朗読の基本。

9:30	◆ オリエンテーション	・自己紹介 ・アナウンスの指導の心構え ・話すこと、読むこと ・放送コンテストの感想と改善点 ・放送コメントの指導法
10:15	◆ アナウンスの指導法（実践）	・「発音」「発声」「イントネーション」 ・自然なイントネーションとは ・伝わるアナウンスを目指して
11:00	◆ 朗読の指導法(実践)	・単に読むことではない ・地の文、「　」の表現 ・メリハリのつけかた
11:45		
12:00	◆ まとめ、質問など	

講　師　：　山　下　俊　文

NHK Communications Training Institute
一般財団法人 NHK放送研修センター 日本語センター
〒157-8520　東京都世田谷区砧(きぬた)1-10-11　電話　03-3415-7121
http://www.nhk-cti.jp　FAX　03-3415-2660

１　自校ニュース原稿　例文

地学部に、月のクレーターもはっきり見えるほどの最新の天体望遠鏡が届きました。

そこで、今回、春の星座を観測する観望会を企画。

顧問の近藤先生は、「普段小さく見える月や星が、立体感を持って見えるんですよ。ぜひ、宇宙を身近に感じてほしい。」とおっしゃいます。

観望会は、４月２３日金曜日、午後７時から、場所は、Ｂ棟の屋上。

星空を眺めて、果てしない宇宙の広がりを感じてみてはいかがでしょうか。

● より読みやすく、伝えやすくするために不適切表現を修正しましょう。

中枢神経が冒される難病の
多発性硬化症を
啓発するイベントに、
同じ病気と闘っている落語家の
林家こん平さんが出席しました。

本当にやりたい仕事が見つからない。

元気で一日を過ごしたいものです。

感染は爆発的に広がっておらず

小康状態を保っている。

ツル鳥インフルエンザ感染専門家見解

節分のきょう、
千葉県の成田山新勝寺では
（なりたさんしんしょうじ）
力士や俳優など
著名人が参加して
恒例の豆まきが行われています。
訪れた５６歳の女性は、
「国際情勢など
心配なことも多いので、
家内安全と
子どもたちが
平和に暮らせる
世の中になるよう
願いました」と
話していました。

２　体育祭開会式の原稿：通常のアナウンスとの違い　（＊時間があれば）

「ただいまから、平成 27 年度「長崎商業高等学校」体育祭の開会式をはじめます。」

「一同、礼」

「開会宣言」

「選手宣誓」

「国歌斉唱」

「以上で、開会式をおわります。」

３　朗読原稿

(1) 平成24年度　第59回大会　●決勝課題
東山　魁夷　作　「ノルウェーの春」より
＊筆者が「ノルウェーの春」と題する自作の絵画に添えた文章。

フィヨルドに沿う村は、林檎（りんご）、杏（あんず）、桜などの花盛り。

湖のある山を越える時、残雪の岩山（いわやま）に白樺の芽吹いているのが印象的だった。

冬と春が鋭く交差する、これがノルウェーの春だ。

（注）フィヨルド‥氷河によってできたU字形の谷が沈降し、海水が侵入してできた狭くて深い入り江。発音は無アクセント。平板に読む。

(2) 平成25年度 第60回大会　●準決勝課題
鎌田 實 作 「がんばらない 」より

仕事に疲れた父と夜遅く、定食屋さんで夕食をすませた。もやし炒めとどんぶり飯。

わびしい光景だが、小学一年生のぼくは夢中でどんぶりにしがみついた。

「うまいか」父の声はやさしかった。

吾輩は猫である

夏目漱石

吾輩(わがはい)は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか　とんと見当(けんとう)がつかぬ。なんでも　薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。

吾輩はここで、初めて人間というものを見た。

しかもあとで聞くと、それは　書生という、人間中で一番獰悪(どうあく)な種族であったそうだ。

この書生というのは時々我々を捕(つかま)えて煮(に)て食うという話である。

しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐しいとも思わなかった。

ただ彼の　掌(てのひら)　に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

掌の上で　少し落ちついて　書生の顔を見たのが「いわゆる人間というもの」の見始(みはじめ)であろう。

トロッコ

芥川　龍之介

小田原・熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を――といったところが、ただトロッコで土を運搬する――それがおもしろさに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後ろにたたずんでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走ってくる。あおるように車台が動いたり、土工のはんてんのすそがひらついたり、細い線路がしなったり――良平はそんな景色を眺めながら、土工になりたいと思うことがある。せめては一度でも土工と一緒に、トロッコへ乗りたいと思うこともある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然とそこに止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はそのとき乗れないまでも、押すことさえできたらと思うのである。

ある夕方、――それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子どもと、トロッコの置いてある村外れへ行った。